

当院における妊孕性温存目的での卵巣刺激および採卵についての検討

勝 佳奈子¹, 門上 大祐¹, 中岡 義晴¹, 森本 義晴²

¹IVF なんばクリニック ²HORAC グランフロント大阪クリニック

【緒言】

女性の妊孕性温存治療の特徴として、原疾患に影響を与えず、限られた期間で多くの卵子または胚の獲得を目指すことが挙げられる。今回、当院にて妊孕性温存目的で採卵となった症例について検討したので報告する。

【対象】

2016年1月から2018年8月の期間で、妊孕性温存目的にて当院での治療を希望され採卵まで至った38名の患者について、後方視的に検討を行った。原疾患は乳癌29例、血液疾患6例、その他3例、平均年齢は34.2歳(21~43歳)であった。

【結果】

当院での治療猶予期間は、手術予定症例では平均で術前4.4週、術後から補助療法開始まで5.9週、化学放射線療法などの治療予定症例では4.1週であった。卵巣刺激日数は平均6.9日、1採卵あたりの採卵数は平均6.5個であった。全採卵周期63例のうち、6例は卵子を獲得できなかった。卵子凍結症例では、凍結数/採卵数(凍結率)は247/296個(83.4%)、胚凍結症例では、2PN 17/26個(65.4%)、分割期胚 35/64個(54.7%)、胚盤胞 4/5個(80.0%)であった。また当院では2017年より同周期に2回採卵を施行するDuostim法を適応のある患者に実施している。妊孕性温存目的で採卵となった患者38名のうち、10名でDuostim法を実施した。Duostim法では、平均卵巣刺激日数は卵胞期7.0日、黄体期11.9日、1回の採卵あたりの平均採卵数は卵胞期5.4個、黄体期8.4個であった。

【結論】

Duostim法では、黄体期は卵胞期より卵巣刺激日数が増えるが、採卵数は卵胞期・黄体期で有意差を認めず、治療期間の限られた妊孕性温存目的での卵巣刺激法として有用であると考えられる。原疾患担当医と連携をとることで治療猶予期間を把握し、患者の状態を踏まえ、採卵にむけてのスケジュールを作成していくことが必要である。